

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

つれづれ
インタビュー
マンガびと

4

福田達雄

プロフィール
1952年広島市に生まれる。石田学園山陽高校普通科卒業。69年「COM」に『ワンタラー（放浪者）』が佳作に入り掲載される。70年「少年ジャンプ」に『どかたの大将』が佳作入選、翌年同誌に『泣くな大将』を掲載。その後、農協、設計会社を経て96年設計会社を起し現在に至る。



似顔絵を投稿するようになった少年時代見たことのない絵を描くのが掲載のコツ

初めて漫画に興味を持ったのは、小学校の4年ぐらいのときでした。友達が持っていた『まぼろし探偵』や『鉄人28号』、それと『鉄腕アトム』を読ませてもらいその子の家まで遊びに行つたことを覚えています。その友達は自作のロボット

をノートに描いたりしていたんです。その影響で自分もだんだん描くようになったんですけど、絵を描くこと自体はあまり好きじゃなかったですね。学校の写生の時間は苦手だったし、絵の具の使い方も下手くそだったんです。

5年生のときに、それまで住んでいた横川というところから、観音新町に引越しました。進んだ

中学のクラスメートに漫画好きの子がいて、大学ノートに戦闘機や戦車を描いていたので、「人物は俺が描く」と言つて二人で合作のようなことをしたことがあります。ノートの半分ぐらいまで描いたかな。授業中にこっそり描いていましたから、なおさら楽しくてね(笑)。

そうこうしているうちに、似顔絵を漫画雑誌に投稿するようになりました。よく投稿していたのは「鉄腕アトムクラブ」という、虫プロが出していた会報誌の投稿欄でした。最初はなかなか入選しないんですよ。投稿欄には常連がいるじゃないですか。そうした人たちに負けたくないのです。なにかいい方法はないかと考えて。それで似顔絵にタイトルロゴを描き加えました。ロゴがあると、ちよつとカッコいいじゃないですか(笑)。そして似顔絵に帽子をかぶせてみたんで

す。そしたら掲載されましたね。どうして載つたんだろうと子供ながらに考えたんですが、投稿者の多くは本編の絵と同じポーズや表情を丸写しに近い形で描いていたことに気がついたんです。だから、これまでに描かれていないポーズとか、描かれていたとしても小さいコマの中に描かれているようなものを描いたほうが載る確率が高い。ちよつと知恵がついたというか(笑)。それが高校生になった頃でしたね。

「つれづれ草」に参加するようになったのもその頃です。広島にも参加者が何人かいて、三次にはおだ辰夫君、庄原には岩崎健二君。そして呉には新宅よしみつさんがいて、お互いに文通したりしていました。僕ら、手紙にはカットを描いて送り合っていたんですが、新宅さんからは色つきのカットがよく送られてきて、うまいなあ、と。肉



1968年9月22日、広島市観音新町の福田氏の自宅に集まった「つれづれ草」広島支部の仲間。左より、福田氏、おだ氏、岩崎氏、恵谷氏。

筆だから余計にわかるんですよ。そこでむらむらと対抗心が出てきて（笑）。上手なカットを見せられると、やっぱり力が入りますから。

文通は頻繁にしていたんですけど、お互いに

会ったのは数回しかないですね。いちど広島の僕の家みんな来てくれたことがあって、狭いアパートの部屋で写真を撮った覚えがあります。その写真、どこかにあると思うんだけど。（後日発見！ 上の写真です）



少し反体制的な漫画でデビュー
描き直しと言われて頭にきたことも

影響を受けた漫画家は、たくさんいます。

望月三起也さんが「少年キング」や「少年サンデー」で描いていた長編が好きでした。『秘密探偵J A』を例に挙げるとわかりやすいですけど、伏線の張り方がすごく面白かった。短編だと山上たつひこさんですね。まだ『喜劇新思想体系』でギャグを描く前の、ミステリアスで骨格のしっかりした作風が好きでした。自分もああいうシリアスなストーリーを描いてみたいと思っています

した。



カット/福田 透郎

初めて商業誌にデビューしたのは69年、高校1年のときでした。「COM」に『ワンダラー〈放浪者〉』という作品が佳作になって掲載されたんです。宇宙から地球に帰ってきた主人公が、地球がぐちゃぐちゃになっているのを見て、それでまた宇宙に戻っていくというストーリーなんです。ちよつと反体制的な傾向があったと思いますが、僕は70年代安保の世代より少し遅れています。ですが、小学生の頃からストのまねごとをしたり、何かというと「異議なし!」と口走ってしまふような子でした。まあ軽い遊びでやっていただけなんですけど(笑)。

当時、おだ君が「少年ジャンプ」の新人賞に入選していたんですが、彼は編集者に何度も描き直しさせられた、と。それどころか大御所の先生でも描き直しさせられることがあると聞いて、漫画家ってそんなに自由のない職業なの? と話した記憶があります。

実際、そのあと70年に「少年ジャンプ」で『どかたの大將』がマンガ賞の佳作に入って、掲載されました。この作品はそのまま掲載されたんですが、年に何本か描けと言われて、次の作品『泣くな大將』を載せるときは、編集者からいろいろ指摘されましたね。ここを直せ、あそこを直せという感じで。広島と東京のあいだで、原稿を送ったりするのを繰り返しながらね。それで頭にきて、直せと言われた部分だけではなくて、全編最初から描き直したんです。それで編集者が「えーっ

全部描き直したの!」って驚いて(笑)。あのときは、切ったり貼ったりして直すという発想もなかったんです。

そうは言っても編集者とのやり取りは、それほどストレスを感じることはなかったんですけど、ちよつと怖い世界だなと。手塚治虫さんも描いているけど、旅館で缶詰状態にされて、編集者がずつと張り込んでいるような感じがあつて。当時、僕は広島の高校生だったし、東京の大人の編集者とやり取りしていたなんて、今思うと考えられないですよ。でもあの頃はみんなそんな感じだったと思います。ほんとに情報がなかったですからね。手塚さんの「漫画のかきかた」や石森章太郎さんの「マンガ家入門」ぐらいしか参考になる本がなくて。あとは文通仲間に聞いたりする程度でした。東京の編集者とやり取りできた

のは、高校生だったし、時間とエネルギーがあつたからだと思います。

「少年ジャンプ」で『どかたの大将』『泣くな大将』と掲載されて、次の作品も『大将シリーズ』で行こうということになりました。そのラストシーンで、登場人物がみんな集まって歌うんですが、そこでちよつと天皇陛下を皮肉るようなシーンを描いたら、どうもまずかつたようで掲載できないと言われてしまいました。反体制的な部分が出たみたいですよ。それ以来全然仕事が来なくなつちやつた(笑)。



上京して漫画家になる道を選ばなかった
20歳を前にして漫画から離れた理由

上京して出版社を回ったこともありました。

高校1年の頃、すでに新宅さんが東京でアシスタ

ントをしていたので、彼のところに泊めてもらって、小学館や集英社、少年画報社などに作品を持っていきましました。小学館と集英社ではさーっと流された感じだったけど、少年画報社ではちよつと褒められましたね。それで作品を送ってほしい、ということだったんですが、そのあとは送らずにそのままになってしまいましたね。当時は地方にいますと、本当に投稿しか手段がなくて、やっぱり広島と東京は距離がありました。

新宅さんは「漫画家になりたい！」と言って東京に飛び出したんですが、それはそれはものすごく影響を受けましたよ。でも僕には度胸がなかった。実際、一人で上京してやっていけるんだろうか、と。行ったら行ったでなんとかならん思っただけど、いろいろ考えてしまつて。想像力が豊かな分、考えちゃうんです（笑）。たかが15、

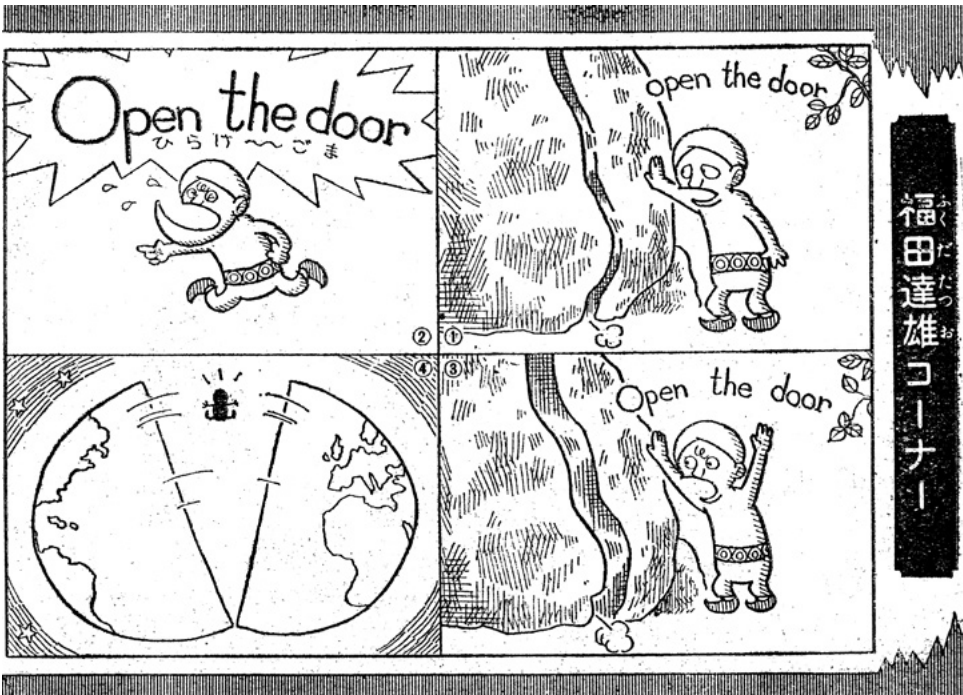
16歳ぐらいのときつて、知識も経験もない。どれだけのものが描けるんだというのが、自分でわかつていきましたしね。当時「COM」でデビューした青柳祐介さんはずつと四国で漫画を描いているということを知つて、地元で描くという選択肢もあるんだという逃げ道があつたのも、上京しない理由のひとつでした。

高校を出てから、大学に行くわけでも就職をするわけでもなかったんです。アルバイトをしながら漫画を描いていましたね。20歳のときに元の農協に就職するまで、何本か描いたと思います。その頃、ちよつと良くないことがあつて、漫画はやめようと。たぶん成人する前にやめたんじゃないかな。

何があつたかというと、ある雑誌に投稿した

んですが、落選後その雑誌で連載されている漫画に僕の作品のアイデアが使用されているモノ

福田達雄コーナー



少年サンデー「まん劇場」で努力賞入選し掲載された四コマまんが

が載っているのを見て、けっこうショックを受けました。しかもかなり有名な漫画家が描いていたんです。それはトリックもので、密室で殺人が起るんですが、外に出ることができなくて、犯人がどう死体を片付けるかという話で、死体をバラバラにしてトイレに流すという話で。今思うとよくそんな恐ろしいことを思いついたなという気がするんですけどね。それがそのまま使われていました。

最初は、盗られた、悔しい、という感じだったんですが、時間が経つにつれ、何かの拍子に僕のアイデアを聞いた編集者がその漫画家にぼろつと言っちゃったんだらうな、とか。いくらアイデアが良くても、それを描く力量が僕にはなかったのかな、と。それに先に発表したもの勝ちだという諦めもありました。



漫画に熱中していた十代の自分を振り返って
今でも無性に描きたくなる漫画への思い

農協に就職して、貯金業務を中心に仕事を
していました。でも自分が描いた漫画みたい
ちよつと反体制的なところがあつて（笑）、同僚
とは仲が良かったんですけど、上司と折り合いが
悪くなつて、3年勤めて辞めました。そのあと、
たまたま友人が設計事務所をやっていたので、そ
こで設計の仕事を始めました。実は高校生の頃、
漫画と並行してレタリングの通信講座を受けて
いたので、その経験もあり、建築パーツの図面に
興味を持ったんです。

96年から設計会社を立ちあげて現在に至りま
す。いちおう社長ですけど（笑）、営業も経営も
全部自分でやっています。機械の設計が業務の

中心ですね。コンプレッサーとかクレーンとか。
社員はいま3人です。

今思うと、漫画に熱中していたのは15歳から
20歳ぐらいまでの5年間でした。たつた5年で
すけど、ものすごく濃かつたと思います。「つれ
づれ草」に参加していたのはもつと短くて3年
ぐらいだったんですが、本当にそうなのかと。な
んだか10年ぐらい関わっていたような気がしま
す（笑）。自分としては、とにかく描くのが楽し
かつた。1コマ1コマ、商売で描いていたわけ
はないし、納得のいくまで、いくら時間をかけて
もよかつた。描いたものはどれだけ批判されても
いいけど、少なくとも描いているときは自由でし
たから。

漫画から離れはしたんですが、たまにカットを

描いてくれと言われることもあって、そんなこんなでちよこちよこ描いていると、無性に漫画を描きたくなることがあるんです。自分の考えていることや思っていることを試したいとか、形にしたという気持ちが湧いてくる。自分では絵はそんなに上手くないと思うし、いいものが描けるかどうかわからないのだけど、描かずにはいられないというか。

前号の「新つれづれ草」で描かせてもらった『車椅子の女』は、何の気なしに描いていたキャラクターが活かされた気がします。普通、30ページ足らずの作品で、登場人物の性格なんてなかなか出せないんです。長編だったらいくらでも性格を掘り下げることができますけどね。でも『車椅子の女』では、ちよつとつり目の変な顔をした男女を登場させたら、描いているうちに愛

着が湧いてきて面白いものになったと思っっています。あと、定規を使わないでフリーハンドで描きました。ちばてつやさんの漫画がそうでしたし、手塚治虫さんの大人向けの漫画『人間ども集まれ!』や『上を下へのジレット』もフリーハンド。ああいうのが僕の理想なんです。

「新つれづれ草」の復刊1号を見ると、みなさん4ページぐらいの作品が多いんですけど、もつと頑張ってたたくさん描いてほしいなという気持ちがあつて『車椅子の女』を出品しました。啓発するとまでは言いませんが、これまで以上に濃い作品を描きたいという人が増えてくれればいいと思っっています。昔の「つれづれ草」はみんな出品してそれが綴じられ、家に回覧されたときの嬉しきといったらなかつたですからね。また僕も新しいものを描こうと思っっています。

●インタビューを終えて

15歳から20歳にかけての5年間。青春を漫画に賭けた福田さんの思いが強く伝わってくるインタビューでした。いちど漫画から離れた福田さんですが、こうして再び作品を描き続けようとする決意を聞くことができたのは何より。ぜひ「新つれづれ草」の参加メンバーを刺激する作品を期待したいところです。

文／中島泰司

2009年10月3日

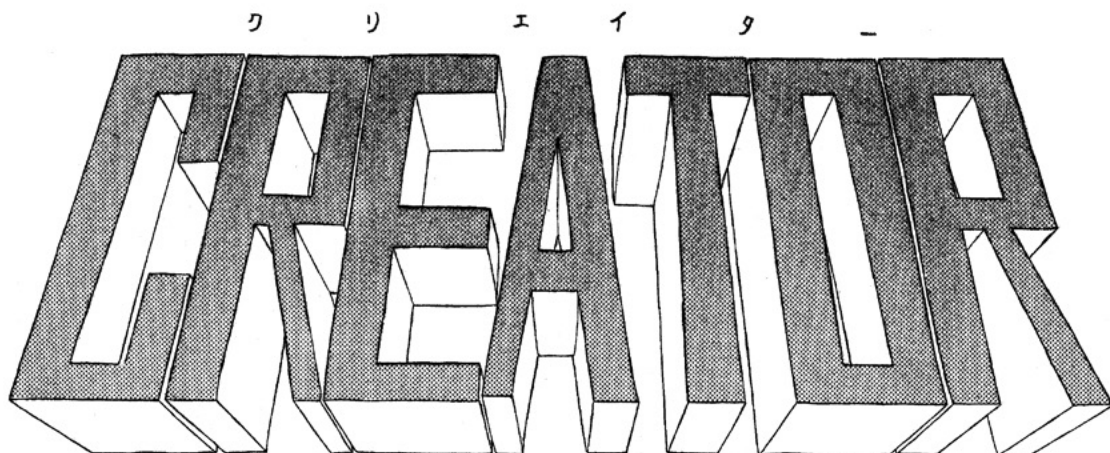
広島駅近くのホテルのティールームにて



福田氏の自画像

SUSPENS-ZONE
THE STORY OF 2001

ACT II



68年「COM」実験まんがコース
佳作「ワンダラー」(漂流者)の続編
70年初旬の作品です。

〈創造者〉
worker
福田 達雄





